



やぐら通信

～ひとみキラキラ豊かな心と体の矢倉っ子～

行事のあとさき

学校には、運動会や校外学習、音楽会、宿泊体験など、さまざまな行事がある。いずれも特色ある取り組みだ。そこでは、子どもたちだけでなく、保護者や地域の方々の感動がわき起こり、そして子ども一人ひとりの成長が確かめられる。いわゆるこれからの社会を生き抜いていくための力が、こうした行事を通して養われているとあってよいだろう。

私が小学生だったころの運動会は、全校児童が紅白に二分され、学年ごとの代表選手リレー、1年生から6年生までの紅白双方から選出された先鋭選手によるリレー、高学年全員が参加する騎馬戦、紅白全員が参加する綱引き、玉入れなど、とにかく紅白対抗の戦いが用意されていた。子どもながらに、勝負をすることのわくわく感と厳しさを感じていた。しかも保護者はもちろん、町中の人達はその勝負を観戦しようと学校へやってきたため、相当な盛り上がりを見せた。運動会の前後数日は、子どもである自分たちはもちろんのこと、近所の大人達も運動会の話でもちきりとなり、町の雰囲気はいつもと異なるものとなった。

そんな中、走ることがそれほど得意でなかった私としては、みんなの前で、しかも多くの知らない町中の大人達の目の前で走ること、気が進まないでいた。勝敗が問われ、盛り上がれば盛り上がるほど、気が進まないのである。それは、ダンスについても同様だった。つまるところ、負けたり、ついていけなかったりすることのみじめさ、はずかしさが恐かったのである。

そんなとき、父が大人達と「一番より尊いビリの話」をしていた。親交のあった東井義雄の話である。どうかすると、沈みこみがちな私に気付き、聞こえよがしに大人同士でその話を持ち出していたのかもしれない。私は私で「それほど現実には甘くない」などと冷やかに受け止めていた。そうこうするうち、運動会の日がやってきた。前日、近所の親しくしているおばさんから声をかけられた。「明日だね。がんばって。」この言葉をもらって、いよいよ覚悟を決めた私だった。そのおばさんからは、運動会の後、「手をピンと伸ばして、前へならえができてたね。それから、走り終わって、みんなの走りを一所懸命、応援しているのがよかった。」と声をかけてもらった。

私たち子どものところでは、どちらが勝つか、誰が一番かばかりが話題になっていた。しかし、後日、運動会の作文を書くことになって、気付いたことがあった。そのおばさんに限らず、担任の先生も、他の大人達も、勝ち負けは確かにあるけれど、大切なのは運動会のそれぞれの役割や仕事をしっかりすること、自分にできることを精一杯取り組むこと、といったことを語っていたのである。

大人になって、あらためて東井義雄の「一番より尊いビリの話」に出会う機会を得た。ずっと心にひっかかっていたものが解けた瞬間だった。

校長 大林 道範